

心電図モニターのアラーム設定について

平成 16 年 8 月 18 日現在

心電図モニターの管理およびアラーム設定が適切に実施されていなかったために入院患者の状態変化に気付かず、患者が死亡するという事故が発生しました。

アラーム鳴動の原因と対策

アラーム鳴動に関連し、以下の 2 点がポイントです。

- 患者の状態観察：
必ず患者の状態を確認し、バイタルサインに急激な変化はないか、確認しましょう。
- 機器の状態：
どのような時にアラームが作動しているか、鳴動の原因を必ず確認しましょう。機器自体が適切に作動していないことは非常に稀です。
患者の筋電図や他機器類の交流障害（ハム）、体動等のアーチファクト（基線の大きなゆれ）などの影響を受けて偽アラーム（患者の状態に異常はない）が鳴動することがあります。

事故を起こさないために必要な視点

1) 心電図モニターは随時確認できる場所に配置されているか？

- 目視できる場所にモニター画面を置き、作動状況が常に確認できるようにしましょう。

2) 勤務交代時や設定変更時に、アラームの設定状況を確認しているか？

心電図モニターに限らず、多くの医療事故原因が、消音（警報オフ）やアラーム音量を絞っていること、設定域値が不適切などのアラーム設定上の問題です。

- 設定域値：患者の状態に応じたアラーム域値に設定しましょう。
- 音量：勤務者がどこで作業をしてもアラーム音が聞こえるように設定しましょう。また、他入院患者にも説明し、理解を得ておきましょう。
- 消音禁止：処置に関連してアラームが鳴動した際にも、絶対に消音（警報オフ）にせず、一時停止などの機能を活用するようにしましょう。

心電図モニター監視時における看護師の役割

心電図モニターは、人間に代わって患者の循環機能を常時監視してくれるという利点がある反面、不適切なアラーム設定や機器に対する医療従事者の過信などが生命の危険に直結するという大きな特徴もっています。

心電図モニターを装着している患者は、『いつ、どこで急変が起こるかわからない』という危険を常に抱えています。常に患者の身近にいる看護師は、異常の早期発見・早期対応が行える様、心電図モニターの適切な取扱い方法を普段から身に付けておくことが必要です。